

追 悼



故 藤本 守 先生 略歴

(昭和6年12月16日生～平成29年12月22日没)

<略歴>

昭和30年 3月 京都府立医科大学卒業
昭和31年 4月 国立京都病院医学実施修練終了
昭和31年 5月 京都府立医科大学生理学講座入室
昭和31年10月 京都府立医科大学第一生理学講座助手
昭和36年 9月 米国 Cornell 大学へ留学
昭和39年 5月 京都府立医科大学第一生理学講座講師
昭和42年 1月 岐阜大学医学部第二生理学講座助教授
昭和48年 4月 大阪医科大学第二生理学講座教授
平成 2年 4月 大阪医科大学図書館長
平成 6年 4月 大阪医科大学図書館長(再選)
平成 7年 6月 大阪医科大学学長
平成11年 5月 大阪医科大学学長退任

<学会活動>

昭和38年 4月 日本生理学会評議員
昭和38年10月 日本腎臓学会学術評議員
昭和50年 3月 日本生理学会常任幹事
平成 3年11月 日本腎臓学会理事
平成 6年 4月 日本腎臓学会法人評議員
平成 9年 4月 日本腎臓学会功労会員
平成14年 4月 日本腎臓学会名誉会員

<主催学会>

平成 3年 3月 第 68 回日本生理学会大会会長

<日本腎臓学会委員会活動>

昭和49年 9月28日～昭和57年11月18日 編集幹事
昭和57年11月19日～平成 8年 3月31日 編集委員会
平成 3年11月 8日～平成 4年12月 4日 用語委員会(委員長)
平成 4年12月 5日～平成 6年 3月31日 学会あり方委員会
委員
平成 6年 4月 1日～平成 7年 3月31日 評議員候補者推薦
委員会

<受賞>

昭和55年 日本腎臓学会賞
平成28年 第 6 回上田賞

藤本 守先生追悼文

大阪医科大学 名誉教授

窪田隆裕

大阪医科大学名誉教授藤本守先生は、心不全のため平成 29 年 12 月 22 日に亡くなりました。2017 年の衆議院選挙の投票所で倒れられ、そのままほとんど意識が戻らぬまま還らぬ人となりました。先生が亡くなられてすぐに追悼文を書かなくてはいけなかったのですが、先生と私の関係は師弟関係以上の密接な関係であったために、纏め切れず今に至ってしまいました。約半世紀(45年)にわたる先生との思い出を先生の奥様と何度もお話ししながら書かせていただきました。

藤本先生は、京都府立医科大学卒業後、吉村寿人教授の講座で助手をされた後、昭和 36 年 9 月に米国、Cornell 大学の Pitts 教授の教室に留学され、腎臓生理学を学ばれました。日本で初めて腎生理学を確立された先生といっても過言ではないと思います。その当時 Pitts 教授が著した「Renal Physiology」を翻訳されているのもその証の一つだと思います。

帰国されてからは、京都府立医科大学の講師、岐阜大学医学部の助教授を経て昭和 48 年 4 月に大阪医科大学第二生理学講座の教授となりました。赴任当時には、すでに多くの大学の非常勤講師をされており、他大学でも腎臓生理学を講義されていました。大阪医科大学の最初の腎臓生理学の学生講義のときには、臨床の先生がたも数多く出席され、講義室が一杯になり、立ち見席で聞かれていた先生もおられたことを今でもはっきりと憶えています。先生の講義に感銘を受け、教育・研究者としての道へ進んだ学生も数多く、その内の 2～3 名は大阪医科大学の教授として現在も教壇に立っています。

大阪医科大学に赴任されてからは、腎臓の研究はマクロからミクロへ変更され、その後の約 15 年間は上皮細胞や骨格筋細胞のイオン測定に全精力を傾けられました。イオン電極法を確立され、そのおかげで私や私の後輩の先生たちも Yale 大学の Giebisch 教授やその他の米国の大学に留学できました。日本の大学の理科系の研究室からも数多くの先生が見学や短期留学にて、大阪医科大学の生理学教室を訪れました。日本では湿気が多く、イオン電極の作製は非常に困難だったのですが、ガラスの洗い方から徹底して教室内をクリーンにされ、蒸留水も自家製の蒸留器から作られました。全ての研究について方法論から徹底的に追求され、生理学のもとになる物理化学を勉強することを大事にされました。イオン電極作製法に関する論文が Jpn J Physiol(1976, 現在は J Physiol Sci)に発表されましたが、その引用文献数はインターネットでの検索が始まるまで、Jpn J Physiol の一般生理学分野で最大の引用数を記録しています。1987 年以降は、パッチクランプ法を取り入れた分子生理学の分野にも着手され、チャネルやトランスポーターの研究もされました。その一つに、近位尿管細胞での H⁺-sensitive K⁺-チャネルの研究がありますが、分子のことを研究されていても、いつも細胞全体を、そして体全体のことを考えて私たちを指導されました。一方で、コンピュータの教室内への設置を早くから取り入れられ、教室全体を床下配線にして現在の光ファイバー配線に対応できる教室作りをされました。

63 歳で教授職を退職され、その後 4 年間は大阪医科大学の学長になられ、大学教員の人材育成に力を注がれましたが、先生は、研究、教育、人材育成のすべての分野に全力投球でした。そのお陰で、大阪医科大学の生理学教室から医学部のみならず、栄養学などコメディカルの分野に至るまで、8 名の教授が育ち

ました。単科の医科大学教室でこれだけの人数の教授を輩出された先生も珍しいのではないかと思います。

先生の生活は、寝る時間を惜しんでの生活でした。現在の時代には適合しない生活だったかもしれませんが、新しいものを開発したり、見つけたりするにはどうしても通らなければならない道であったと思います。先生自らが率先して仕事をされるので、教室員はついていかなければならず、大阪医科大学赴任後の最初の5年間ぐらいは大変な毎日でした。しかし、先生が厳しくされていたのは、その厳しさを乗り越えてこそ、研究・教育者としての喜びが待っているということを知っておられたからだと思います。

藤本先生の研究や教育面での業績は、先生の書かれた数多くの論文や教科書を読んでいたければ解ると思います。しかし、藤本先生の人生観や教育・研究者として歩かれた道については、やはり尊敬されていた久野寧先生の言葉に集約されるのではないのでしょうか。「医道とは弱者への無限の愛である」という言葉です。先生の家玄関にはこの言葉を刻んだ銅板(約30×20 cm)が飾ってありました。仕事の行き帰りにこの言葉をご覧になり、自分に言い聞かせておられたのではないのでしょうか。私は、先生の人生がこの言葉通りのものであったと思います。そして、私自身は弱者であったからこそ、この言葉の真の意味が理解でき、今も心に残っているのだと思います。

先生のご自宅には独身時代からよく泊めていただき、食事をご馳走になりました。そこには、先生が普段は人にみせない優しい姿がありました。略歴にある写真のお顔がそれを物語ってくれているような気がします。

本当に、長い間日本の生理学会、腎臓学会、そして大阪医科大学のためにご尽力いただきありがとうございます。心より先生のご冥福をお祈りいたします。